

の内容を表現する事も出来る。或る一時代憧憬も、或る一世紀に通じた努力も、さながらに表はし出す事も出来る。そしてこれらのものは、文學を以て叙述する時は、たとへ散文や詩歌の何れかに、ほんの輪廓を寫すにも多大のページを費さねばならないものである。又藝術家に許された構圖の自由によつては、即ち明暗と、形體と色彩との結合などによつては、繪畫は其の取扱ふ主題を、表現すると同時に理想化する事が出来る。たゞ繪畫には時間と場所との制限がある、詩は、例へば叙事詩に於けるが如く、殆んどあらゆる時間と面積とに行き亘る事が出来るが、繪畫の創作には、時間も特殊に、面積にも定限のあるのは已むを得ない事である。然し畫家には其の制限に對して埋め合せの利得がある。即ち僅かな一小畫面に、ある時間を明示し、さまぐの物語の、隠れた意味の大部分を描き出す、凝集の力を有してゐる。これあるが爲めに、言語を通しては表はし難いさまぐの世相(aspects of life)をも、畫面に表現する事が出来るのである。

附記、 以上はナイト氏の繪畫概論である。これ以下は、模倣、暗示の論から色彩、技巧などの論に這入つて行く。次號からは少し長い段落を紹介して行く事とする。

萬世不易と一時流行

中 村 不 折

此言葉は、芭蕉が俳句に就て、主唱したのであつて、其時に流行に連れて、目先の變つた珍しさうな仕事をして、只、世間の氣受斗りを、本位にして、實質の如何を問はず、只新奇く、と騒いで居るのに對して、芭蕉が萬世不易説を主唱して、其作品が幾年經つても價值の變らぬしつかりした物を、こしらへると云ふのであつた。是は、何時の世にも文藝美術には必らず伴つて行くことであつて、近頃の様に無暗に新しい事斗り尊んで、少し地道に研究して居る人間を見ると、直ちに時世後れとか、老耄だとか云ふは、少し考へて貰ひたいものである。今日本の藝術に、一番缺乏して居ることは、基礎が強固でないのにある、言ひ換れば、藝術の基礎を

強固にすると云ふことが、目下の最も急務であると思ふ。然し、其基礎を強固にすると云ふことは、實際餘り派手な仕事でなくて、割合に骨が折れる、それで誰にしても、そう云ふ様な事をするよりも、やはり時流に連れて基礎などにかまはず、一寸表面の派手な事をやる方が、面白い爲に、基礎の研究などゝ云ふことは誰もやらぬと云ふ有様である、我々の、今日の腕前を西洋人の普通の藝術家と比べて見ると、遺憾ながら遠く及ばないのである。夫であるのに關はらず、今時の若い人達は、少し腕が利く様になつて、文展へでも及第する様になると、もう非常の大家になつた様な顔をして、基礎の強弱などは殆ど考へて居ない、のみならず少し眞面目になつて居るのを、罵倒して、時勢後れであると云ふ様なことをいふて居る。此間三會堂で、ロダンの彫刻を見た時に思ひ出したが、何でもあの彫刻を見た人々が、ロダンと云ふ人はもう少し氣拔な仕事をする筈である、然るに此仕事を見ると餘り眞面目であつて、ロダンに對する要求を充たして居らぬと云ふ様な歎聲を洩らして居るのを聞いたが、然し、一體に味いと云ふこと丈は首肯したらしいロダンが、今日の盛名を馳せたのは、實際、日本の青年諸君の考へて居る様な奇拔なことや、變つたことをした爲でなくて、其技術の旨いと云ふことが、最も與つて力がある、實力のあるのが世間の尊敬を博した所以である、夫は種々變つたこともやるが、もしロダンが仕事が目くなくつたら、誰も何共云はぬであらう。ロダンのロダンたる所以は、技術の旨いと云ふことにあつて、技術以外にロダンは無いと思ふ、西洋の絶代の大家の仕方は、皆此技術の旨いのであつて、さう云ふ名家の作品程、日本の青年は敬服しないであらう、却て、三流以下の、只、時流を逐ふて居る一種の山師の様な畫家の作品が、却て歓迎される様な有様で、名家の作品は作品を見ないで、只傳記を見て驚いて居ることが多い。ロダンを學べんとするにはロダンの勝れて居る技術を學んで、主義などは二の次にして差支ない、夫が却て、ロダンを學ぶ眞實の事になるであらう、要はロダンの主義を充分に行ひ得る基礎を學ぶことが、最も必要である。